



MMIJ2018 (福岡) GA 企画講演パネルディスカッション 「博士課程リーディングプログラムを振り返って」実施報告

九州大学グリーンアジア国際リーダー教育センター・助教
船津 貴弘

1. はじめに

平成 30 年 9 月 11 日に資源・素材学会全国大会、MMIJ 2018(福岡)において GA 主催の企画講演を実施しました。「博士課程リーディングプログラムを振り返って」という

タイトルで、パネルディスカッション形式で行いました。企画講演の主旨は、次の通りです。

「博士課程教育リーディングプログラム」は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する事業である。

平成 24 年度に採択された九州大学グリーンアジア国際戦略プログラムおよび秋田大学レアメタル等資源ニューフロンティアリーダー養成プログラムの実施終了を目前とした段階で、それぞれのプログラムを振り返り、いくつかのテーマについての教員および学生参加によるパネルディスカッションを実施する。また、ポストリーディングとして博士資源人材育成についての提言を行う。

パネラーは、プログラムに関わる教員、学生および産業界から民間の技術者、またリーディングプログラムに関連しない大学から教員ならびに学生の合計 8 名です。司会は、九大笹木先生ならびに船津で担当いたしました。参加者は、30 名程度であり、学生、民間企業や研究機関、学会関係者と多岐にわたっており、関心の高さを感じました。また、OB である 1 期生の松本さん、正木さんも出席されました。

2. パネルディスカッションについて

パネルディスカッションで扱った討議の内容は、(1) 入コースの方法、(2) カリキュラムについて、(3) QE の方法について、(4) 経費の問題、(5) 就職などについてと設定し各論について主としてパネラーやフロアからの意見を伺った。

企画講演では、まず笹木先生より、講演の要旨説明があり、次にパネラーの紹介を行った後、秋田大学のリーディングプログラムの説明、九州大学の GA の紹介を行いました。その後各論に進みました。

(1) 入コースについて

秋田大学の柴山先生から、日本人学生は博士課程まで進みたいと希望する者が少ないので、コース生との交流会を設けるなどプログラムについて知ってもらう機会を設けたということでした。一方留学生については JICA などの制度を活用することや大学が有するネットワークを活用することで比較的容易に集めることができたという話がありました。

(2) カリキュラムについて

GA3 期生の高橋さんから、英語の授業は非常に有用であったという話が合った。博士課程では英語で論文を書かなければならないが、通常のカリキュラムでは英語のライティングの授業はないため、英会話ではないテクニカルな英語、論文を書くために必要な英語の授業が GA でおこなわれていたのでとても良かったという話が合った。また、GA では、学生は各研究室ではなく GA の部屋に固まっており、同じ部屋にはガーナ人 1 人やタイ人 1 人、インドネシア人 2 人で日本人は 1 人というグローバルな環境になっていた。当然会話をしようとなると英語を使用する環境であり日常英会話能力も授業はもちろん部屋の中

でも学べたなという部分が大きかった。

住友金属鉱山岡本氏からは、国内の資源精錬に関し、研究基盤の維持拡大という課題は一つの大学や企業では、なかなか厳しいという現状があるので、産学官の連携のもとオールジャパンで取り組む課題と認識しているとの話があった。こういったプログラムを通じて産業界でも世界の最先端でも活躍できる人材を育てていけたらいいと思う。企業もアプリケーションの出口を用意することが大事だと思う。

(3) QE について

九大高橋さんから、印象としてはきつかったことを覚えています、QEの時期は修士論文の時期とほぼ同じなのでQEの発表のレポートの準備をしつつ修士論文発表準備をするという状況で、2つの作業を同時に進めなくてはならず、またどちらも合否があるので、学会発表とはまた違った試験の準備なので戸惑いもありました。

(4) 経費の問題

秋田大学柴山先生から、このような補助事業は国から頂いているお金なので、頂いたお金でいかに効率よくやるかを考えなくてはならないのですが、幸いなことに今年最終年度で削られた状況ではあるのですが、学生支援分はかならず確保する、学生がフィールドワーク等の活動ができる経費を優先させて計上しています。どうしても期限付きの補助授業は事業が終わった後を考えなくてはならず、むしろここからが正念場であると思っています。九大島田先生から、最終的には学生への支援、どれだけ学生のアクティビティを維持できるか、後方活動をどこがサポートしていただけるかということにつきると思

ます。目的が同じところで手を携えあって何かしら支援ができる母体を作っていく方向にシフトしていくことが個人的には大事なことだと思います。

(5) 就職について

1期生正木さんから、GAのプログラムで自分の専門分野とは他に経済や環境、社会学について学んだので俯瞰力がついたと感じる。GAで学んだことが生かせるのかなと思ひまして独立行政法人を選んだという経緯です。

採用者側からの意見として、産業技術研究所は研究機関でございますので、このリーディングプログラムは企業のリーダーになるような人材とアカデミックな人材を輩出するというのが目的であると思います。我々研究所でどのような人材が必要かといいますと、課題をみつけてその課題について過去の研究をちゃんとレビューしてどういったものを選ぶか見極めて、実験や野外調査をしてそれを考察してちゃんと論文まで一貫して研究をおこなえる人材を育成が必要となります。当然研究所に入ってから初めは訓練なども積んでいきますが、このプログラムのような取り組みを引き続きおこなっていただけたらいいなと思いました。

3. 参加者からの意見

パネルディスカッション終了後、参加者にアンケートを実施しました。20名から回答をもらいました。資源工学分野において博士人材育成プログラムが今後も必要があるかという質問に対し95%の方から「そう思う」という回答がありました。



パネラーの皆様